

あの頃、思い出の現場

鹿島港中央防波堤本体工事

株木建設株式会社 茨城本店土木部部长 川村 功氏

「美装」を通じて技術者のプライド実感

大学で土木工学を専攻したのは「建築よりもスケール感があり、大きな仕事に携わりたいという願いを叶える」ためだった。就職活動を行った1980年代前半は就職難の時代。試験が受けられる会社を探すのも大変な中で、「地元の茨城県に拠点があり、仕事を通じて地域貢献もできる」という理由から、株木建設への入社を決めた。

最初に配属されたのは茨城県日立市で施工した下水



川村 功氏 (かわむら・いさお)
1982(昭和57)年日本大学生産工学部土木工学科卒、株木建設入社。2011(平成23)年茨城本店土木部工事長、2014(平成26)年茨城本店土木部次長、2017(平成29)年茨城本店土木部部长。茨城県出身、58歳。

処理場の建設現場。現場管理のイロハを一から学んだが、「学生時代に工事現場でアルバイトをしていたこともあり、職人さんと一緒に体を動かすことも多かった」という。先輩には「それはおまえの仕事ではないとよく怒られていた」そうだが、「最前線の大変さを身を以て知

ることは、その後の仕事でも大いに役立った」と若かりし日を振り返る。

現場代理人として2004(平成16)年6月から携わった

「鹿島港中央防波堤本体工事」は、15・0×16・2×12・0mという大きさのケーソン2函を約半年間で製作するプロジェクト。鹿島港にある国土交通省のドックは製作できるケーソンの高さに制約があり、運び出した後に1・5m分を海上で打ち足す作業が必要だった。

た「鹿島港中央防波堤本体工事」は、15・0×16・2×12・0mという大きさのケーソン2函を約半年間で製作するプロジェクト。鹿島港にある国土交通省のドックは製作できるケーソンの高さに制約があり、運び出した後に1・5m分を海上で打ち足す作業が必要だった。

ケーソン製作は若い頃に日立港で経験したが、所長として陣頭指揮を執ったのは鹿島港が初めて。「同じ土木でも陸と海では条件がまったく異なる。スケールの大きさ、天候の変化を読む力

。経験と知識が必要だと感じた」そう。そうした中で、工事の責任者として「現場をいかに効率的に運営するか。工事関係者に気持ちよく働いてもらうことにとにかく腐心した」といい、「国土交通省の監督職員と一体

になったことは自分の糧になった」と今でも感謝している。

ケーソン製作の仕上げ工程で使われる「美装」という言葉も、この時初めて聞いた。「この言葉を聞いた時、海上工事の関係者が持っているプライドを感じることも

ができた。技術職は「自分が造った」という満足感が得られる仕事。茨城県は自分の出身地でもあり、誇りとやり甲斐を実感できた」と語る。

工事ではもう一つ、思い出に残っていることがある。それは社会インフラの重要性をより多くの人に知ってもらい、同時に建設業のイメージアップを図るという

広報活動だった。「一体どうすればいいのか頭を悩ませた。そんな時に思い付いたのは、現場に人



ドックから引き出したケーソン



フリーマーケットは多くの来場者でにぎわった

が来ないなら集めてしまおうというアイデア」だった。現場近くの福祉センターに場所を借りフリーマーケットを開き、同時に鹿島港整備の情報も発信した。

協力会社を含めて準備は大変だったが、「近隣の方々など多くの人に会場いただき、結果的に大盛況で終えることができた」といい、この取り組みが評価され「発注者から表彰を受けたのは思い出深い出来事」と話す。現場を離れ、統括管理の立場に就いたのは3年前。現場で汗を流す部下や後輩に「大丈夫か、無理はするな」と話し掛けることを心掛け、「事故がなく笑顔で現場を終える。心を一つにして頑張っている」と常に願っている。